

第6版のはじめに

ご存知のように平成30年度の公募で科研費制度の改革が行われ、審査方法や申請書の内容が大きく変更された。改革後の新しい制度やフォーマットに対応するために、第5版の出版から1年で今回の第6版に改訂することになった。

第5版では今回の科研費改革の正式な発表が発行直前であったため、変更点の追記に留まり、特に新しい申請書のフォーマットへの対応は不十分だった。そこで今回の改訂では、制度改革の部分や、「3章：申請書の書き方」の各項目についてよりわかりやすくなるよう整理しなおし、大幅に書き直した。また巻末の「実際に採択された申請書」の見本については、現時点では採択された新しいフォーマットの申請書が手元にないため、以前のフォーマットのもを新しいフォーマットに変更して使用した。ご容赦いただきたい。

その新しいフォーマットの申請書だが、これまでの申請書に比べて、書くスペースが若干少ないように感じる。なにも多く書けばいいというものでもないが、基盤研究では書くスペースが少なすぎる。そのため、これまで以上に簡潔に要点を押さえて書かなければならない。ますます申請書の書き方によって、評価の差が出てくるのではないだろうか。

毎年、全国の大学や研究機関に科研費セミナーに招かれる。そこでいつも感じるのは研究者やそれを支援する方々の真剣な取り組み姿勢だ。なんとか科研費を獲得したい、研究を発展させたい、獲得の支援をしたい、学内の研究活動を活発にしたいなどの思いだ。その思いに応えるためにも、初版から現在まで、本書の改訂には真剣に取り組んできたつもりだ。

また昨年、某所で行っていた科研費セミナーの最中に、ふと気づかされたことがある。それは、本書を書くことの最も大切な目的は「頑張れば科研費獲得も可能だ」と研究者の方々に（少々大げさだが）夢や希望をもってもらうということだ。科研費獲得は「とても難しく無理」なのではなく、「自分でも科研費をとれるかも」「科研費をとりたい」と思ってもらうことだ。本書はもちろん科研費をとるための指南書であるが、研究者や研究支援者を勇気づけること、これが一番の目的だと思った。このことを、セミナー参加者から「科研費をとれるような気がしてきた」と嬉しそうに言われることから気づいた。

この第6版も皆さんのお役に立てればと願っている。

2018年7月

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康

初版のはじめに

この本は研究費のなかでも、科学研究費補助金（以下、科研費）を獲得するための申請書の作成方法について、具体的なテクニックをわかりやすく紹介したものだ。

毎年9月になると次年度の科研費の申請が始まる。いうまでもなく科研費は研究費の基礎として非常に重要だ。科研費に採択されるか採択されないかは、研究計画やキャリアに大きな影響を与える。ところが科研費の採択率は現在では約20～25%であり、4～5人に1人しか採択されない狭き門であり、採択されない人の方が圧倒的に多い。科研費にはぜひ採択されたいと誰もが思うが、世の中には「科研費を獲得できる申請書の書き方」などのガイドブックがありそうだが、これまでにお目にかかったことがない。各個人、各講座でのテクニックがあり、それはほとんど門外不出になっている。毎年春になって、その年度の科研費の審査結果が発表されると、毎回のようによく採択される人がどの大学にも研究所にも必ずいる。彼（彼女）らはいったいどのような申請書を作っているのだろうか？

そういった疑問をもったのがきっかけで、個人的にいろいろ調べた結果をもとにして、この本を書いた。いろいろな研究者の科研費申請書をチャンスがあればコピーさせてもらったり、久留米大学で保管されている過去の申請書を、無理をいって読ませてもらったりした。さらに科研費を審査する側の経験も積んで、他大学の研究者の申請書もたくさん読んだ。またラボ内の若手やスタッフ、知り合いの研究者などから相談を受けて、申請書作成の手伝いもした。このような経験からいうと、絶対に採択されるという申請書はないが、（多分）絶対に採択されない申請書はある。「科研費に採択されるのは宝くじに当たるようなものだ」「コネがないと採択されない」などと聞いたこともあるが、しかし、そんなことはない！ 科研費の審査はきわめてフェアなもので、しっかりと準備をしてよい申請書で応募すると、結構採択されるものだ。しかも宝くじよりもずっと当たる確率が高い。

若手研究者に「科研費の申請書の書き方は、どこで習ったか？」と聞くと、まずほとんどの者が「ラボの先輩が作成しているのを、見よう見まねで作成している」と答えるだろう。私もそうだった。実物の申請書は作成した個人がコピーを保管しているだけで、見せて欲しいと頼まないと、見る機会などなかった。私のラボでは毎年の申請書を全員の分をコピーして保存してあり、誰でもいつでも見ることができる。もちろん採択されたものも不採択のものも全部資料としておいてある。これらの資料は、これから申請書を書こうとする者に、非常に役に立っていると信じている。なんととっても実物の申請書に勝る見本はない。そこで、こ

の本では恥ずかしながら私の実物の申請書を見本として付けているし、本文中に出てくる例はすべて実物がもとになっている。ただし、内容は最新のものではなく、2～3年以上前の申請書のものを使っている。

第1章では、科研費とはどのようなものか、現状分析、科研費の種類、審査のしくみ、申請から採択までの流れなどについて紹介している。

第2章では申請にあたっての準備について書いてある。応募種目や応募分野の選び方や、どのような課題が採択されているかや、過去の審査委員についての調べ方を紹介してある。

第3章がこの本の中心部分で、実際の申請書の書き方をできるだけ実物の見本を示しながら解説してある。申請書の各項目ごとにポイントを書いて、どのように書けばよいかアドバイスしている。

第4章は書き上げた申請書をさらに読みやすくするための工夫について紹介している。また、わかっているようでやってみると結構戸惑う電子申請の仕方について順を追って説明した。

第5章は採択・不採択のときにどうすればよいかについて説明した。

この本に例としてあげた申請書は、久留米大学分子生命科学研究所のメンバーによる実物で、快く提供してくれたみんなに感謝している。また悪い例としたにもかかわらず、資料を提供してくれたメンバーには特に感謝している。また佐藤貴弘くん、佐藤浩くん、前原佳代子さん、高山優子さんの4名には「初めての科研費」として経験談をコラムにまとめてもらった。久留米大学研究推進課の梶原克彦さん、川辺貴光さん、村上郁磨さんと久留米大学分子生命科学研究所事務室の土岐陽子さんには、科研費の資料を快くみせてもらって感謝している。また羊土社の吉田雅博さん、冨塚達也さんには「実験医学」連載時からお世話になった。吉田さん、冨塚さんなしにはこの本は完成できなかった。

この本が少しでもみなさんのお役に立って、1人でも多くの方に「科研費に採択された」と喜んでもらえるようにと願っている。

2010年7月

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康